



ASA-1171

IN THE UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE

In re Patent Application of

H. OIKAWA

Serial No. 10/796,045

Group Art Unit: 3753

Filed: March 10, 2004

Examiner: T.J. WALBERG

For: LIQUID COOLING JACKET

TRANSMITTAL OF CERTIFIED PRIORITY DOCUMENT

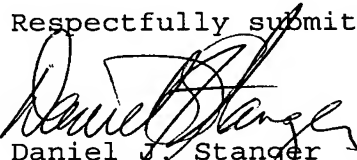
Commissioner for Patents
P.O. Box 1450
Alexandria, VA 22313-1450

September 6, 2005

Sir:

Submitted herewith is a certified priority document (JP 2003-349701) of a corresponding Japanese patent application for the purpose of claiming foreign priority under 35 U.S.C. § 119. An indication that this document has been safely received would be appreciated.

Respectfully submitted,


Daniel J. Stanger
Registration No. 32,846
Attorney for Applicant

MATTINGLY, STANGER, MALUR & BRUNDIDGE, P.C.
1800 Diagonal Rd., Suite 370
Alexandria, Virginia 22314
(703) 684-1120
Date: September 6, 2005

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日 2 0 0 3 年 1 0 月 8 日
Date of Application:

出 願 番 号 特 願 2 0 0 3 - 3 4 9 7 0 1
Application Number:

[ST. 10/C]: [J P 2 0 0 3 - 3 4 9 7 0 1]

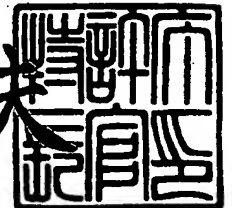
願 人
Applicant(s): 株式会社日立製作所

CERTIFIED COPY OF
PRIORITY DOCUMENT

2 0 0 4 年 3 月 1 8 日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今 井 康 夫



出証番号 出証特 2 0 0 4 - 3 0 2 2 0 7 3

【書類名】 特許願
【整理番号】 K03009801
【提出日】 平成15年10月 8日
【あて先】 特許庁長官殿
【国際特許分類】 H01L 23/473
【発明者】
 【住所又は居所】 神奈川県海老名市下今泉 8 1 0 番地 株式会社日立製作所 インターネットプラットフォーム事業部内
 【氏名】 及川 洋典
【特許出願人】
 【識別番号】 000005108
 【氏名又は名称】 株式会社日立製作所
【代理人】
 【識別番号】 100080001
 【弁理士】
 【氏名又は名称】 筒井 大和
 【電話番号】 03-3366-0787
【手数料の表示】
 【予納台帳番号】 006909
 【納付金額】 21,000円
【提出物件の目録】
 【物件名】 特許請求の範囲 1
 【物件名】 明細書 1
 【物件名】 図面 1
 【物件名】 要約書 1

【書類名】 特許請求の範囲**【請求項 1】**

発熱体に接合するベースと、
前記ベースに対して垂直に立っている柱と、
前記柱に取り付けられ、前記ベースと平行に配置された複数の放熱フィンと、
前記複数の放熱フィンの間を所定の幅で埋める仕切りと、
前記柱および前記放熱フィンを囲み前記ベースと接合し、前記仕切りにより冷却液の流れが分けられる位置に前記冷却液の入口および出口が取り付けられたケースとを備え、
前記複数の放熱フィンは、その厚みに比べて狭い間隔で配置されることを特徴とする液冷ジャケット。

【請求項 2】

請求項 1 記載の液冷ジャケットにおいて、
前記柱は円柱であり、
前記放熱フィンは前記柱に対して同心円形状であることを特徴とする液冷ジャケット。

【請求項 3】

請求項 1 または 2 記載の液冷ジャケットにおいて、
前記柱は前記ケースの天面に接触し、前記柱の熱を前記天面に伝えることを特徴とする液冷ジャケット。

【請求項 4】

請求項 3 記載の液冷ジャケットにおいて、
前記ケースの天面に空冷のヒートシンクを取り付けたことを特徴とする液冷ジャケット。

【請求項 5】

請求項 1、2、3 または 4 記載の液冷ジャケットにおいて、
前記柱はヒートパイプの機能を有することを特徴とする液冷ジャケット。

**【書類名】明細書****【発明の名称】液冷ジャケット****【技術分野】****【0001】**

本発明は、電子機器の冷却に用いられる液冷システムにおいて、発熱体に取り付ける液冷ジャケットに関するものである。

【背景技術】**【0002】**

従来、電子機器の冷却に用いられる液冷ジャケットは発熱体の熱を冷却液に効率良く伝える必要がある。

【0003】

そこで、従来の液冷ジャケット内部の流路は、一例として、図18に示すように、蛇行状になっているものがあった。これはジャケット1301内部の流路1302を蛇行させ、冷却液の流れ1303がジャケット1301に極力接触するようにしたものである。これはジャケット1301内部の流路長を極力長くすることで、冷却液とジャケット内部壁面の接触面積を増やし、発熱体からの熱を効率良く冷却液に伝えようとする方法である。

【0004】

また、別の例として、図19に示すように、冷却液の流れ1401を複数の流れ1403a~1403fに分配するものがあった。これは流路パスを複数もつことで、流路抵抗を低下させ、尚且つ冷却液と放熱フィン1402の接触面積を増やして効率良く熱を伝えようとする方法である（例えば、特許文献1参照）。

【0005】

また、冷却液出入口が並んで配置されている方が配管上利便性に優れているため、冷却液出入口を並んで配置したものがあった。これは、図20に示すように、並んだ放熱フィン1501の中央に仕切り1502を設け、冷却液の流れ1401をUターンさせることで出入口を並んで配置する方法である（例えば、特許文献2参照）。

【特許文献1】特開2000-340727号公報

【特許文献2】特開2002-170915号公報

【発明の開示】**【発明が解決しようとする課題】****【0006】**

しかしながら、図18に示す様な蛇行状の流路では、流路長が長くなるほど流路抵抗が増大し、圧損が大きくなってしまいう問題があった。

【0007】

また、図19に示す様な、冷却液の流れを複数の流れに分配する流路では、冷却液を放熱フィン間に均一に流すことは困難という問題があった。詳しくは、液流には直進性があるため、入口近くにある放熱フィンには冷却液が流れにくくなるという問題があり、図19に示すように流速1403aから1403fにばらつきが生じることになる。これによって熱伝達率の低下が起こり、発熱体の熱を効率良く冷却液に伝えることができなくなる。

【0008】

また、図20に示す様な構造においても、放熱フィン間の液流1503aから1503cにばらつきが生じるという問題がある。詳しくは、出入口に近い流速1503bが一番速く他の1503aや1503cは流速が低下する。これによって熱伝達率の低下が起こり、発熱体の熱を効率良く冷却液に伝えることができなくなる。

【0009】

また、前記説明した何れの従来技術においても、より多くの接触面積を確保しようとしてジャケットサイズを大きくしても、中心の発熱体からの距離が遠くなるため、熱伝導率向上が困難であるという問題がある。詳しくは、従来は、図21に示すようにベース301により水平方向に熱を広げて、各放熱フィン302に熱を伝えている。ところが重量



や高さの関係からベース厚 t_1 には制限があり、実際は厚くても 7 mm 程度となるため、熱の広がり 303 は発熱体 103 周囲にとどまってしまい、端の放熱フィン 302a まで熱を伝えることができない。即ちジャケットサイズが大きくなるほど、端の放熱フィンの冷却効果は低下する。

【0010】

本発明の目的は、熱伝達効率が良く、更に拡張性や組立性に優れた液冷ジャケットを提供することにある。

【課題を解決するための手段】

【0011】

本発明による液冷ジャケットは、発熱体に接合するベースと、ベースに対して垂直に立っている柱と、柱に取り付けられ、ベースと平行に配置された複数の放熱フィンと、複数の放熱フィンの間を所定の幅で埋める仕切りと、柱および放熱フィンを囲みベースと接合し、仕切りにより冷却液の流れが分けられる位置に冷却液の入口および出口が取り付けられたケースとを備え、複数の放熱フィンは、その厚みに比べて狭い間隔で配置されるものである。

【発明の効果】

【0012】

(1) 本発明によれば、液冷ジャケット内部の冷却液流は、複数流路を確保しているため、流路抵抗が低く、かつ冷却液の出入口の大きさは、並んだ放熱フィンの高さとほぼ同じにすることにより、各放熱フィン間の流速を均一にすることができる。

【0013】

(2) 本発明によれば、各放熱フィンに熱を伝える柱は太く、その高さは発熱体と接触しているベースから近距離にすることができるため、熱伝導効率が高い。

【0014】

(3) 本発明によれば、放熱フィン間に設けられた仕切りにより冷却液の順路は U ターンするので冷却液出入口を並んで配置でき、配管上利便性に優れている。

【発明を実施するための最良の形態】

【0015】

以下、本発明の実施の形態を図面に基づいて詳細に説明する。なお、実施の形態を説明するための全図において、同一の部材には原則として同一の符号を付し、その繰り返しの説明は省略する。

【0016】

図 1 により、本発明の液冷ジャケットが適用される電子機器の構成を説明する。図 1 は、本発明の液冷ジャケットが適用される電子機器の斜視図であり、電子機器の例としてデスクトップ型パーソナルコンピュータの例を示している。

【0017】

図 1 において、筐体 101 の内部の底面付近にはマザーボード 102 があり、その上には発熱体である CPU 103、チップセット 104、メモリ 105 が搭載されている。また、外部記憶装置として、HDD 106、FDD 107、CD-ROM ドライブ 108 が搭載されている。CPU 103 には本発明による液冷ジャケット 131 が取り付けられている。

【0018】

この液冷ジャケット 131 は銅あるいはアルミといった伝熱性に優れた金属からできている。

【0019】

CPU 103 との接触面はサーマルコンパウンド、もしくは高熱伝導性シリコンゴムなどを挟んで圧着しており、CPU 103 で発生する熱が液冷ジャケット 131 に効率良く伝わる構造になっている。また、液冷ジャケット 131 の内部にはポンプ 132 により冷却液が流れており、熱が冷却液に伝わる構造になっている。

【0020】

筐体 101 の背面外部には、放熱部であるヒートシンク 135 が配置されており、ヒートシンク 135 はベース 135 a およびフィン 135 b から構成され、ベース 135 a の内部には冷却液が流れており、冷却液の熱がベース 135 a 全体に伝わる構造になっている。なお、ベース 135 a には一定の液量を保持する機構も具備されている。即ち、ベース 135 a は冷却液のリザーブタンクとしても機能している。

【0021】

フィン 135 b は筐体背面側を向くように配置されている。つまり、フィン 135 b にファン 113 の風が当たるようになっている。

【0022】

筐体 101 の背面に取り付けられたファン 113 は、ヒートシンク 135 と対面で配置されており、ファン 113 の風は直接フィン 135 b に当たるようになっている。より詳しくは、ファン 113 は、軸流ファンであり筐体 101 の内部側が吸気側、ヒートシンク 135 側が排気側となっている。ファン 113 の隣には電源 109 がある。

【0023】

チューブ 133 および金属管 134 は、液冷ジャケット 131 とヒートシンク 135 を繋ぎ、内部に冷却液を流すことで液冷ジャケット 131 とヒートシンク 135 の熱輸送路となっている。

【0024】

全体の配管は、金属管 134 を主体としており、部分的にゴム性のチューブ 133 を用いている。このチューブ 133 は曲げることができるため、CPU 103 の交換等のメンテナンスが容易になる。つまりファン 113 やヒートシンク 135 を外すことなく、液冷ジャケット 131 を CPU 103 から外すことが可能である。また、チューブ 133 以外の配管を金属管 134 とすることで水分透過を抑制している。

【0025】

冷却液の流れる順路は、ポンプ 132 - 液冷ジャケット 131 - ヒートシンク 135 - 再びポンプ 132 という順路である。このようにポンプ 132 により冷却液を流す方向はヒートシンク 135 通過後の冷却液を吸い込み、液冷ジャケット 131 に排出するようにしている。これによりポンプ 132 には冷却後の冷却液が流れ、ポンプ 132 の加熱を防いでいる。

【0026】

次に、図 2 ～ 図 7 により、本発明の液冷ジャケットの構造について説明する。図 2 は本発明の液冷ジャケットの分解図、図 3 は本発明の放熱フィンへの熱伝導を説明するための説明図、図 4 は本発明の柱にヒートパイプを用いた例を説明するための説明図、図 5 は本発明の冷却液の流れを説明するための説明図、図 6 は本発明の入口および出口の口径を小さくしたいときの形状を説明するための説明図、図 7 は本発明の入口および出口の口径を小さくしたいときの別の形状を説明するための説明図である。

【0027】

まず、構成要素について説明すると、図 2 に示すように、発熱体 103 に接合するベース 201 と、そのベース 201 に対して垂直に立っている柱 202 と、その柱 202 にベース 201 と平行に取り付けられている放熱フィン 203 と、その放熱フィン 203 の間を所定の幅で埋める仕切り 204 と、柱 202 および放熱フィン 203 を囲み、ベース 201 と接合し、かつ冷却液の入口 206 および出口 207 が設けられたケース 205 で構成されている。

【0028】

ベース 201 は発熱体 103 と高い平面度で接触しており、また、柱 202 を垂直に保持する役目と、ケース 205 と共に水密を確保する役目をしている。また、熱を効率良く柱 202 に伝えるため、銅のような熱伝導率の高い材質を使うと良い。なお、ベース 201 は柱 202 と一体構造となっても良いし、柱 202 がベース 201 を貫通して、直接発熱体 103 と柱 202 が接触している構造でも良い。この場合ベース 201 の熱伝導率はさほど重要ではなくなるため、安価な材料を使うことができる。

【0029】

柱202は発熱体103の熱を垂直方向に伝え、更に、放熱フィン203に熱を伝えている。従来技術では、前述したように、図21の熱の広がり303に示すベース201により水平方向に熱を広げて、各放熱フィン302に熱を伝えている。ところが重量や高さの関係からベース厚には制限があり、実際は厚くても7mm程度となるため熱抵抗が高く、熱の広がり303は発熱体103周囲にとどまってしまい、端の平板302aまで熱を伝えることができない。

【0030】

一方、本実施の形態では、図3に示すように、各放熱フィン203への熱伝導は柱202が担っており、この柱202は円柱形状で直径 r_1 が約30mmと太さがあり熱抵抗が低い。更に柱202の頭頂部においても、柱202の高さは、冷却液の入口206および出口207の口径ほどの高さで十分冷却が行えるため、例えば、入口206および出口207の口径が、内径 7ϕ 、外形 9ϕ の場合は、10mm程度の高さも良く、発熱体103からの距離が近いので、発熱体103の熱401が十分に伝わる。

【0031】

なお、更に冷却能力を向上させるため、図4に示すように、柱202にヒートパイプ209を用いても良く、ヒートパイプ209の機能を有していれば、図4に示した構造以外のものも可能である。

【0032】

放熱フィン203は柱202に取り付けられており、ベース201と平行な位置関係となっている。また、放熱フィン203は柱202の同心円状の形状になっており、柱202からの熱を冷却液に伝える役目をしている。なお、更に冷却液との熱伝達率を向上させるため、放熱フィン203の表面上に突起や開口等を設けても良い。

【0033】

なお、この実施の形態では、柱202は円形状、放熱フィン203は、柱202の同心円状の形状としているが、柱202および放熱フィン203の形状はこれに限らず、他の形状であっても良い。

【0034】

また、本実施の形態の放熱フィン203は空冷用のフィンとは異なる設計にする必要がある。詳しく説明すると、空気と液体の熱容量はかなり異なり、例えば、水は空気に比べて89倍の熱容量がある。即ち液体である冷却液は空気よりも熱を奪う能力に優れているため、空冷用に比べてフィンを小型にすることができる。

【0035】

しかし、液冷用のフィンとしての注意すべき点は、フィンの熱伝導能力が低いと、冷却液に熱を奪われてフィン端の温度がすぐに低下してしまう。その結果、フィン端の温度が低いままになってしまい、フィン端まで、熱が伝わりにくくなり、冷却能力が低下してしまう。即ち、液冷用のフィンは高い熱伝導能力が要求される。

【0036】

具体的には、一般的に空冷用の放熱フィンは、熱を放出するのに多くの空気を必要とするため、放熱フィンの厚みに比べて放熱フィン間を広く取る場合が多いが、本実施の形態での、液冷の場合は逆に放熱フィン間を狭くし、放熱フィンを厚くしてフィン自身の熱伝導能力を高める方が良い。本実施の形態の場合は、水冷用として、放熱フィンの厚さに対して放熱フィンの間隔を狭くし、例えば、放熱フィン203の厚みは2mmであり、フィン間の隙間は1mmとしている。

【0037】

放熱フィン203には、図2に示すように、各放熱フィン203間を所定の幅で埋める仕切り204が設けられている。この仕切り204は、図2に示す冷却液208の流路を形成するためのものである。これにより液流はUターンするため、入口206と出口207は平行して配置することができ、配管上の利便性を向上させることができる。なお、Uターンさせる必要が無ければ、仕切り204を省略して、入口206と出口207を反対

に配置しても良い。

【0038】

入口206と出口207は、冷却液を放熱フィン203間に均等に流す役目をしている。本実施の形態では、図5に示すように入口206と出口207の大きさを、各放熱フィン203の高さとほぼ等しくしている。これにより、ジャケットに入ってきた冷却液208から、各放熱フィン203間を流れる冷却液208aを均一にすることができる。

【0039】

ここでもしジャケットと接続するチューブ等の都合で口径を小さくしたい場合は、図6に示すように、入口206および出口207の形状を、チューブ133の差込部分以降をテーパ状にすれば良い。また、図7に示すように、入口206および出口207を放熱フィン203に対して角度を付けて配置し、入口206および出口207と放熱フィン203の間を斜めの壁で接続するようにしても良い。

【0040】

次に、図8～図10により、本発明の液冷ジャケットにおいて、組立性を考慮した例について説明する。図8および図9は本発明の組立性を考慮した液冷ジャケットの構造を説明するための説明図、図10は液冷ジャケットの仕切りの形状を説明するための説明図である。

【0041】

図8に示すように、ベース201と柱202および放熱フィン203は回転旋盤加工で一体成形され、かつ、ベース201淵周囲にはネジ切り加工701がされている。一方ケース205にも対応するネジ切り加工がされている。

【0042】

また、ケース205には、図9に示すように、冷却液の入口206と出口207の間には仕切り204が挟まる溝801が設けてある。

【0043】

なお、仕切り204は、図10に示す形状をしており、放熱フィン203にはめられるよう、溝901がある。また、仕切り204は、図9の矢印802に示すように放熱フィン203にはまった状態でスライド移動するようになっている。

【0044】

なお、この仕切り204の熱膨張率を放熱フィン203の熱膨張率と異なる値にすることにより、組み立て時には、容易に仕切り204と放熱フィン203とを動かせるように仕切りの溝901を加工し、実際の冷却時には、冷却液の熱により、仕切りの溝が狭まり、仕切り204と放熱フィン203とが完全に密着するようにしても良い。

【0045】

本実施の形態での液冷ジャケットの組立手順としては、まず、仕切り204を放熱フィン203にはめ込む。次に、ケース205をベース201に置き、このとき仕切り204は溝801の間にはまるようにする。その後はケース205を回転させてベース201にねじ込むだけで良い。このときねじ切り加工701は、テーパ状とすることで、容易に水密を取ることができる。

【0046】

次に、図11～図17により、本実施の形態の液冷ジャケットの他の構造について説明する。

【0047】

図11は本発明の液冷ジャケットを重ねて更なる性能向上を図った例を示した図、図12は本発明の液冷ジャケットの上部に空冷ヒートシンクおよびファンを重ねて更なる性能向上を図った例を示した図、図13は本発明の液冷ジャケットと一体になった空冷ヒートシンクにより更なる性能向上を図った例を示した図、図14および図15は本発明の液冷ジャケットの冷却液の入口および出口の配置を変えた例を示した図、図16および図17は本発明の液冷ジャケットの放熱フィンに螺旋状の放熱フィンを用いた例を示した図である。

【0048】

本実施の形態での液冷ジャケットは、発熱体の熱を垂直方向に伝導させるため、図11に示すように、液冷ジャケットの上に更に液冷ジャケットを重ねて熱伝達効率を更に向上させることが可能である。詳しくは、発熱体103の熱を受けた柱202は、ケース205の天板1001と接触しており、熱的に接続されている。従って発熱体103の熱は、矢印1002に示すように上部ジャケットの柱202まで伝わる。これにより、発熱体103の熱は複数のジャケットにより冷却液に伝えられるため、熱伝達効率が更に向上する。

【0049】

また、柱202とケース205の天板1001を熱的に接続させることにより、図12に示すように、空冷ヒートシンク1101およびファン1102を取り付けて更なる冷却能力の向上を図ることができる。

【0050】

更に図13に示すように、柱202は天板1001を貫通し、空冷ヒートシンク1201と一体形状となっても良い。

【0051】

また、液冷ジャケットの入口206および出口207の向きについては、図14および図15に示すように、片側もしくは両側の出入口の方向を変えることもできる。

【0052】

また、螺旋状の放熱フィンを用いることにより、仕切り204を用いずに冷却液をターンさせることもできる。

【0053】

これは、図16および図17に示すように、螺旋状の放熱フィン1801を用いることにより、入口206により入ってくる冷却液を螺旋状に流し、上部の出口207から排出するものである。本実施の形態の場合、出口207の位置は、ケース205の上部であれば良く、例えば、図16に示す207'の位置や、図17に示すようにケース205の天面にあっても良い。

【0054】

以上のように、本実施の形態では、発熱体103に接合するベース201と、ベース201に対して垂直に立っている柱202と、柱202に取り付けられ、ベース201と平行に配置された複数の放熱フィン203と、複数の放熱フィン203の間を所定の幅で埋める仕切り204と、柱202および放熱フィン203を囲みベース201と接合し、仕切り204に対して対称となる位置に冷却液の入口206および出口207が取り付けられたケース205とを備え、複数の放熱フィン203は、その厚みに比べて狭い間隔で配置されるようにしているので、液冷ジャケット内部の冷却液流は、複数流路を確保しているため、流路抵抗が低く、かつ冷却液の出入口の大きさは、並んだ放熱フィン203の高さとほぼ同じにすることにより、各放熱フィン203間の流速を均一にすることができる。

【0055】

また、各放熱フィン203に熱を伝える柱202は太く、また高さは発熱体103と接触しているベース201から近距離とすることができるため、熱伝導効率が高い。

【0056】

また、放熱フィン203間に設けられた仕切り204により冷却液の順路はUターンするので冷却液出入口を並んで配置でき、配管上利便性に優れている。

【図面の簡単な説明】**【0057】**

【図1】 本発明の液冷ジャケットが適用される電子機器の斜視図である。

【図2】 本発明の液冷ジャケットの分解図である。

【図3】 本発明の放熱フィンへの熱伝導を説明するための説明図である。

【図4】 本発明の柱にヒートパイプを用いた例を説明するための説明図である。

【図 5】本発明の冷却液の流れを説明するための説明図である。

【図 6】本発明の入口および出口の口径を小さくしたいときの形状を説明するための説明図である。

【図 7】本発明の入口および出口の口径を小さくしたいときの別の形状を説明するための説明図である。

【図 8】本発明の組立性を考慮した液冷ジャケットの構造を説明するための説明図である。

【図 9】本発明の組立性を考慮した液冷ジャケットの構造を説明するための説明図である。

【図 1 0】液冷ジャケットの仕切りの形状を説明するための説明図である。

【図 1 1】本発明の液冷ジャケットを重ねて更なる性能向上を図った例を示した図である。

【図 1 2】本発明の液冷ジャケットの上部に空冷ヒートシンクおよびファンを重ねて更なる性能向上を図った例を示した図である。

【図 1 3】本発明の液冷ジャケットと一体になった空冷ヒートシンクにより更なる性能向上を図った例を示した図である。

【図 1 4】本発明の液冷ジャケットの冷却液の入口および出口の配置を変えた例を示した図である。

【図 1 5】本発明の液冷ジャケットの冷却液の入口および出口の配置を変えた例を示した図である。

【図 1 6】本発明の液冷ジャケットの放熱フィンに螺旋状の放熱フィンを用いた例を示した図である。

【図 1 7】本発明の液冷ジャケットの放熱フィンに螺旋状の放熱フィンを用いた例を示した図である。

【図 1 8】従来の液冷ジャケットで流路が蛇行するもの示した図である。

【図 1 9】従来の液冷ジャケットで流路が複数あるもの示した図である。

【図 2 0】従来の液冷ジャケットで流路が U ターンするもの示した図である。

【図 2 1】従来の液冷ジャケットの熱の伝わり方示した図である。

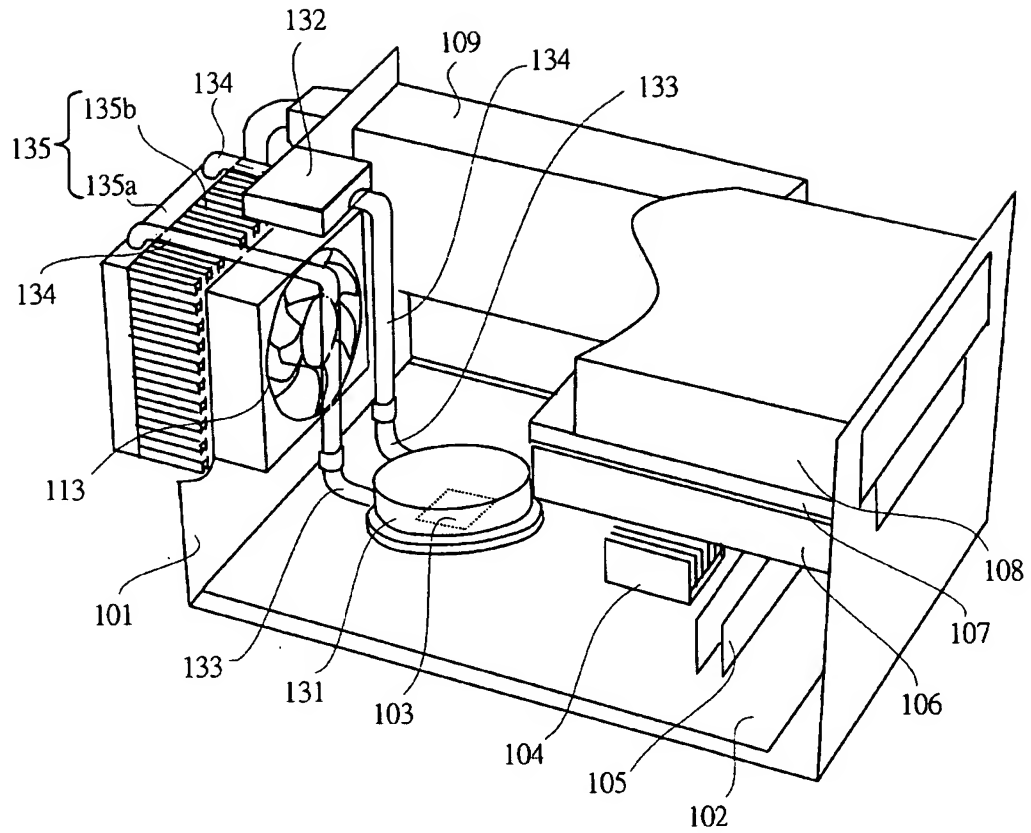
【符号の説明】

【0 0 5 8】

1 0 1…筐体、1 0 2…マザーボード、1 0 3…CPU（発熱体）、1 0 4…チップセット、1 0 5…メモリ、1 0 6…HDD、1 0 7…FDD、1 0 8…CD-ROMドライブ、1 0 9…電源、1 1 3…ファン、2 0 1…ベース、2 0 2…柱、2 0 3…放熱フィン、2 0 4…仕切り、2 0 5…ケース、2 0 6…冷却液入口、2 0 7…冷却液出口、2 0 9…ヒートパイプ、1 3 1…液冷ジャケット、1 3 2…ポンプ、1 3 3…チューブ、1 3 4…金属管、1 3 5…液冷システム用ヒートシンク、8 0 1…溝、9 0 1…溝、1 0 0 1…ケースの天板、1 1 0 1…空冷ヒートシンク、1 1 0 2…ファン、1 2 0 1…空冷ヒートシンク。

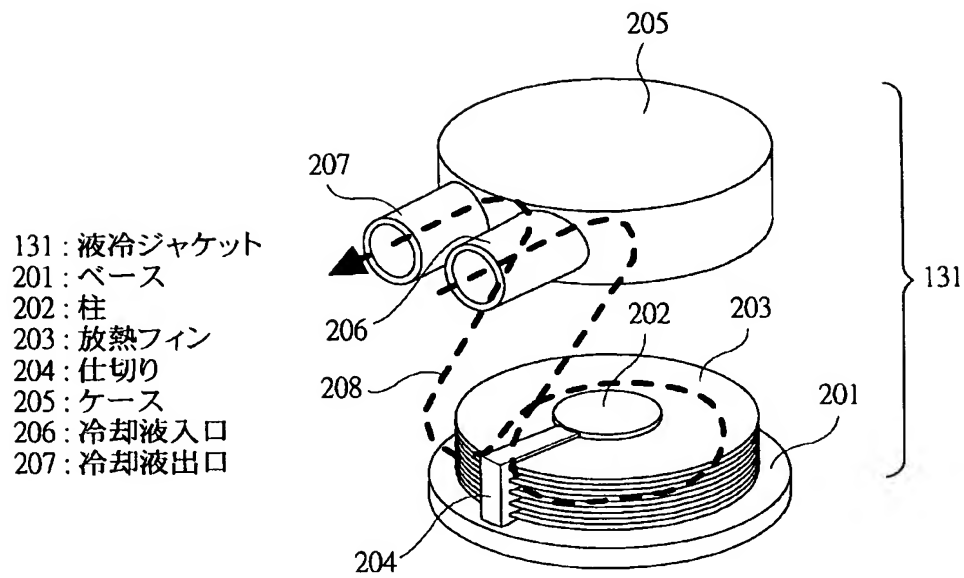
【書類名】 図面
【図 1】

図 1



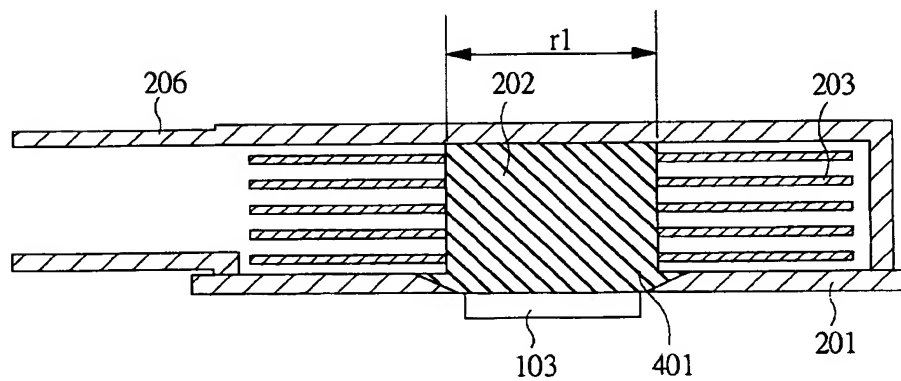
【図 2】

図 2



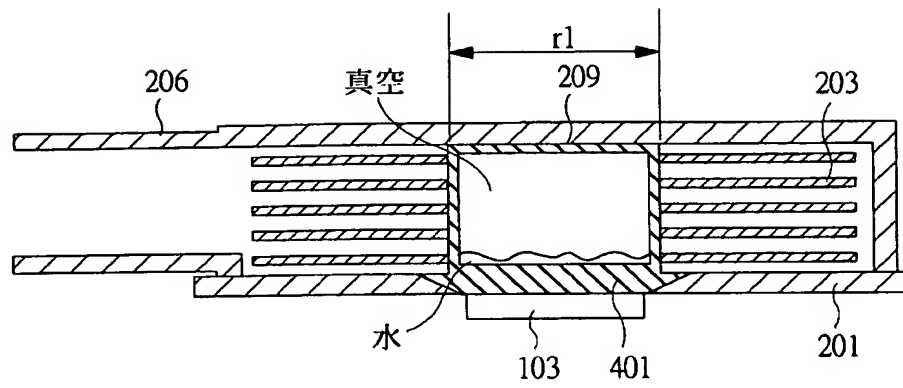
【図 3】

図 3



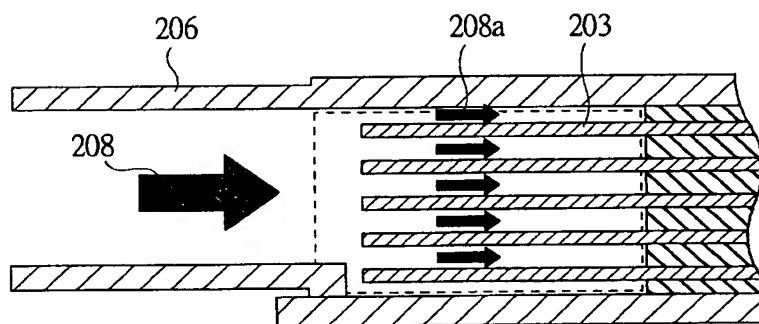
【図 4】

図 4



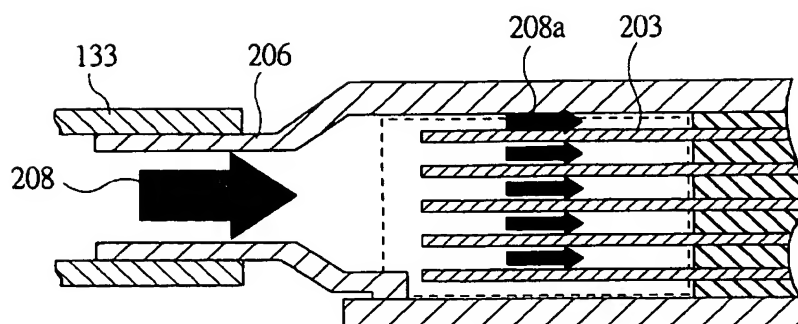
【図 5】

図 5



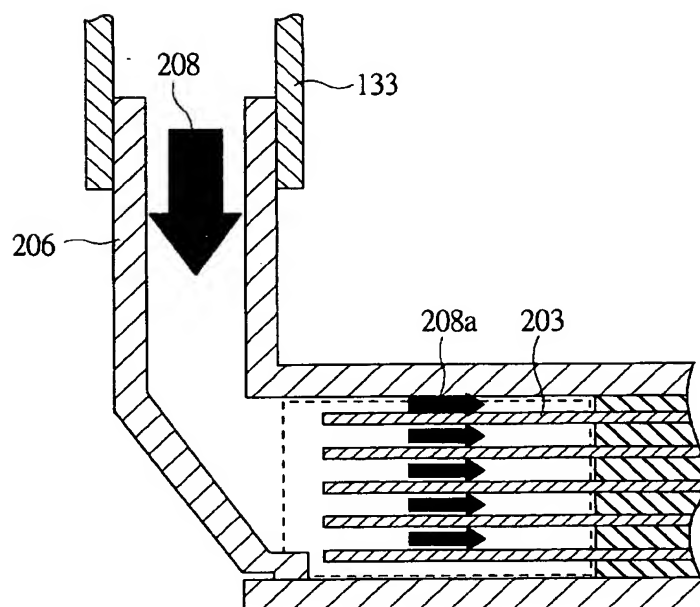
【図 6】

図 6



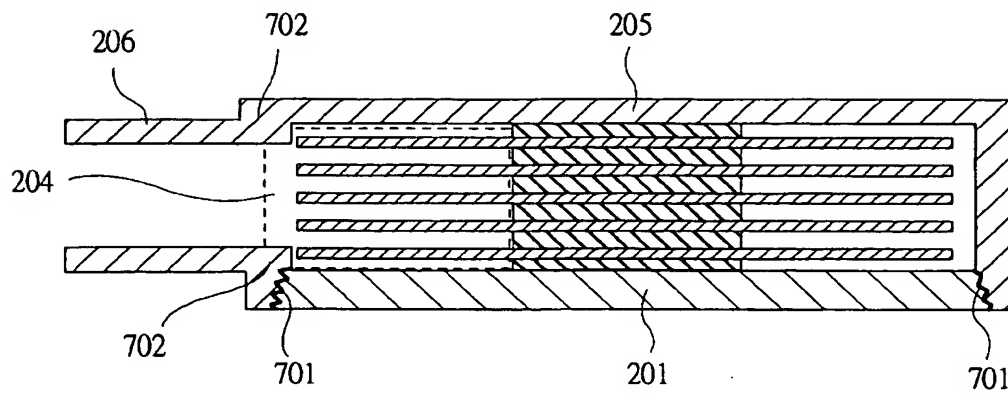
【図 7】

図 7



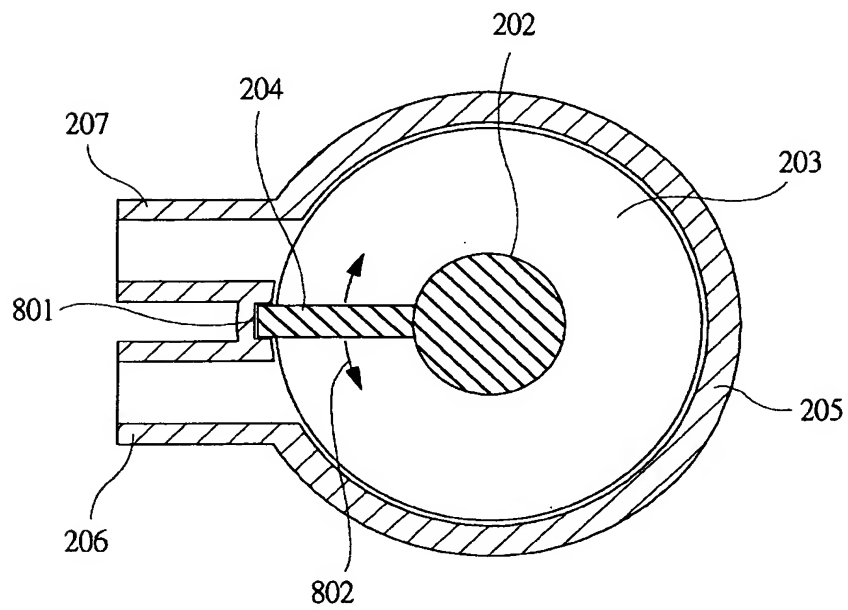
【図 8】

図 8



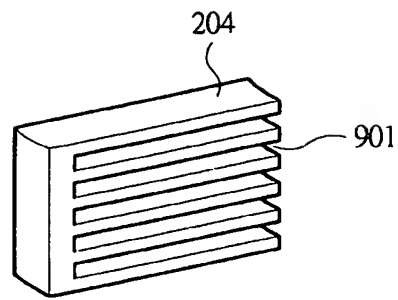
【図 9】

図 9



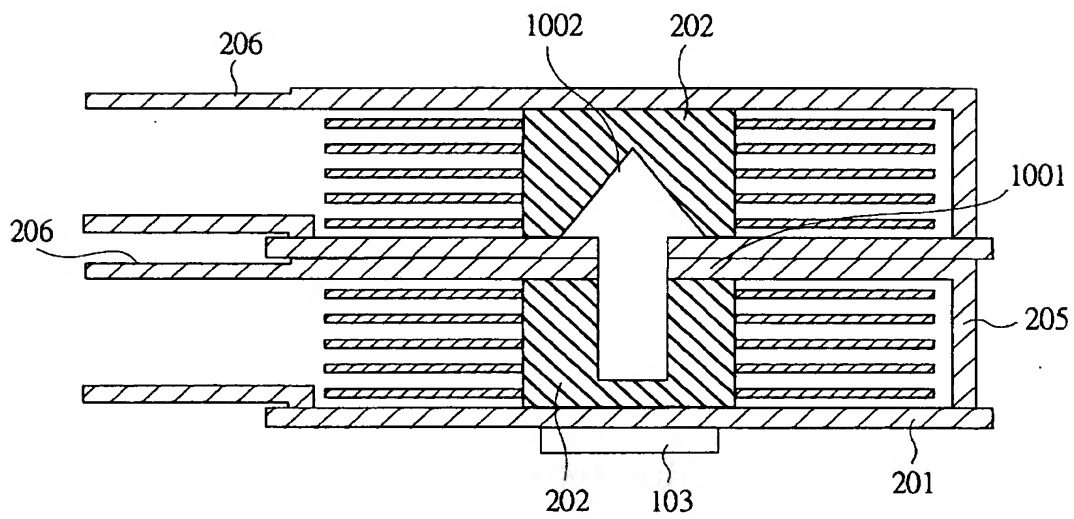
【図 10】

図 10



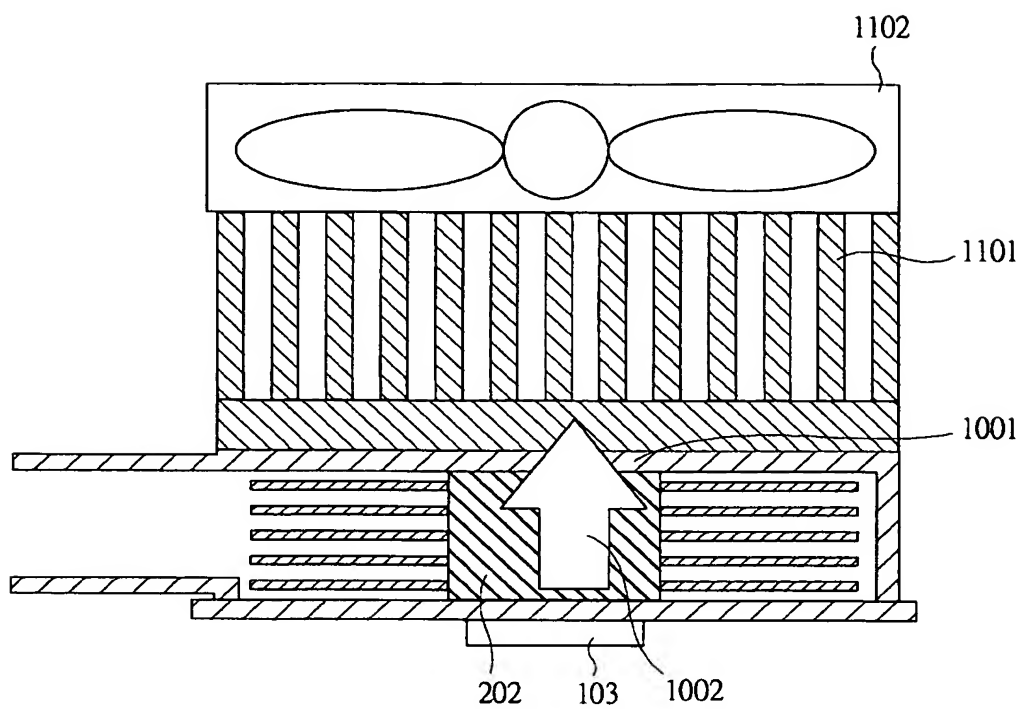
【図 11】

図 11



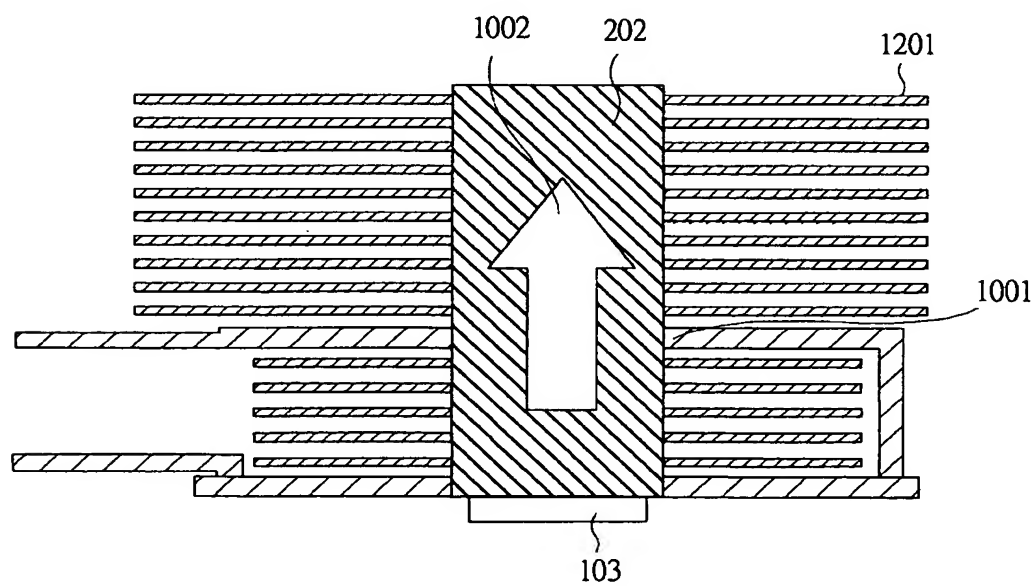
【図 12】

図 12



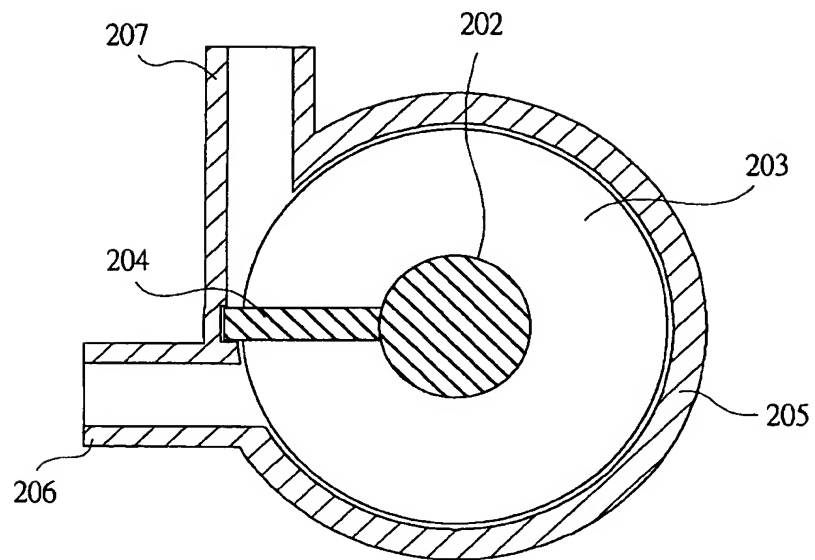
【図 13】

図 13



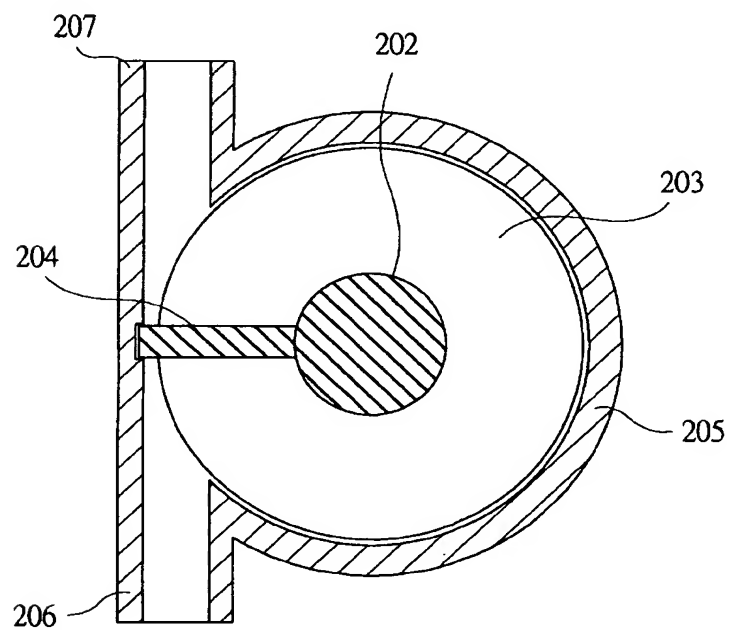
【図 14】

図 14



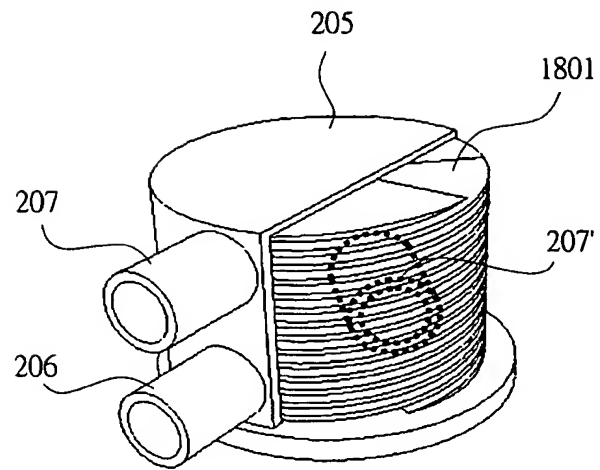
【図 15】

図 15



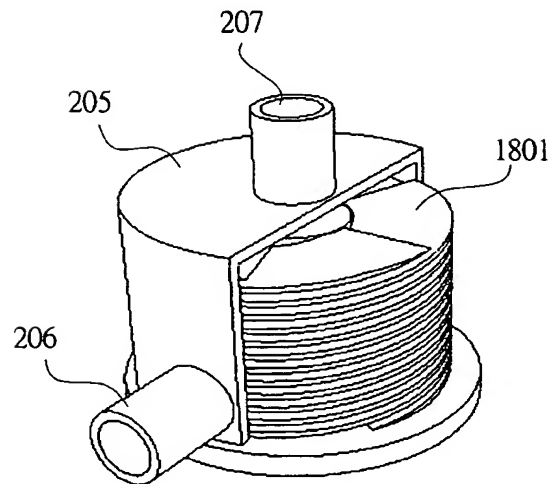
【図 16】

図 16

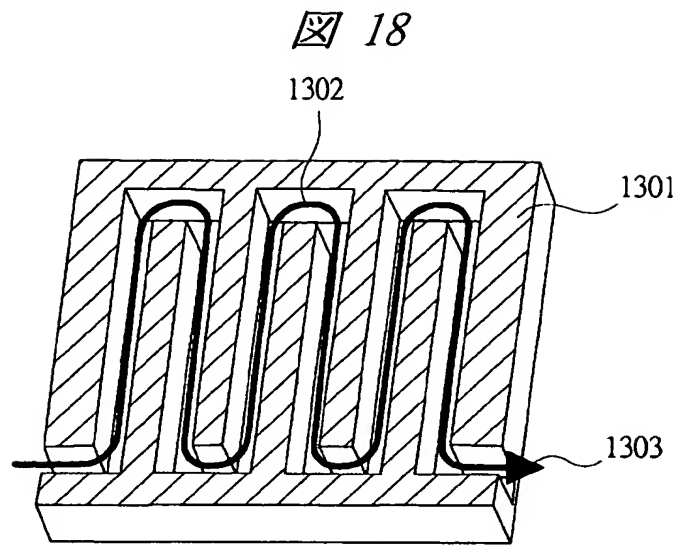


【図 17】

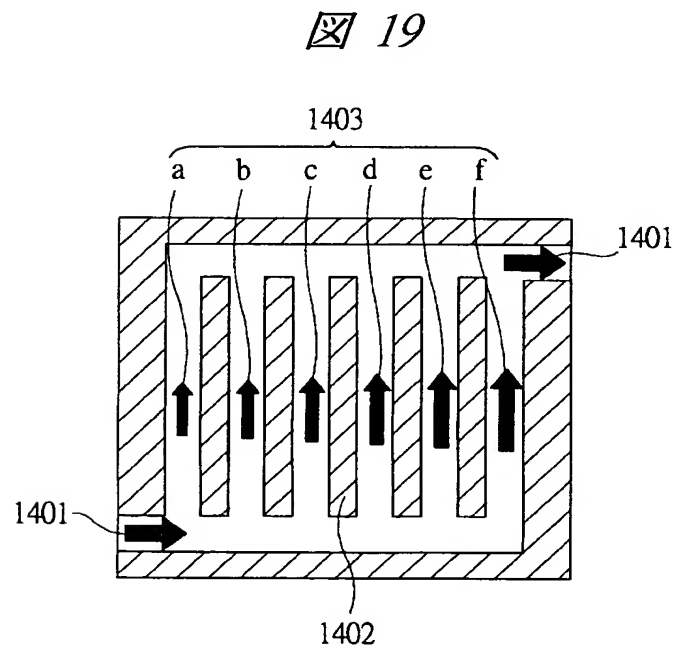
図 17



【図 18】

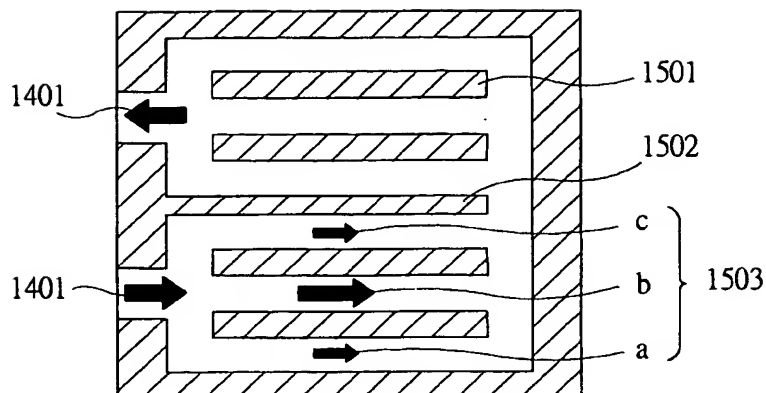


【図 19】



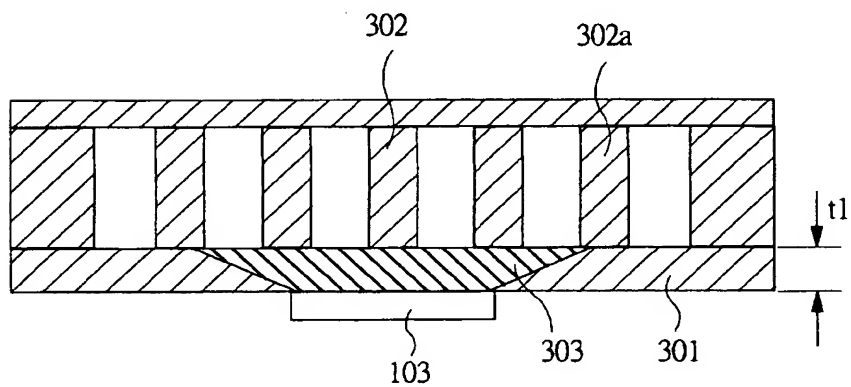
【図 20】

図 20



【図 21】

図 21



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 熱伝達効率が良く、更に拡張性や組立性に優れた液冷ジャケットを提供する。

【解決手段】 発熱体に接合するベース 2 0 1 と、ベース 2 0 1 に対して垂直に立っている柱 2 0 2 と、柱 2 0 2 に取り付けられ、ベース 2 0 1 と平行に配置された複数の放熱フィン 2 0 3 と、複数の放熱フィン 2 0 3 の間を所定の幅で埋める仕切り 2 0 4 と、柱 2 0 2 および放熱フィン 2 0 3 を囲みベース 2 0 1 と接合し、仕切り 2 0 4 により冷却液の流れが分けられる位置に冷却液の入口および出口が取り付けられたケース 2 0 5 とを備え、複数の放熱フィン 2 0 3 は、その厚みに比べて狭い間隔で配置される。

このため、液冷ジャケット内部の冷却液流は、複数流路を確保しているので、流路抵抗が低く、かつ冷却液の出入口の大きさは、並んだ放熱フィン 2 0 3 の高さとはほぼ同じにすることにより、各放熱フィン 2 0 3 間の流速を均一にすることができる。

【選択図】 図 2



特願 2 0 0 3 - 3 4 9 7 0 1

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[0 0 0 0 0 5 1 0 8]

1. 変更年月日

1 9 9 0 年 8 月 3 1 日

[変更理由]

新規登録

住 所

東京都千代田区神田駿河台 4 丁目 6 番地

氏 名

株式会社日立製作所